

弥生 vol.19



言葉と声

令和3年12月発行 弥生神社

02 弥生神社

ワークショップ / 手仕事の会 /
『大祓詞』書写会 / 宗教・文化講座
/ グリーフケアを考える会



05 毒蛇と神の真名 和田浩一郎

07 声の力 森 岳人

10 本を読む「言葉と声」 小河洋友

11 言葉と声 岸田真弓

13 旅の止まり木・11 「言葉と声」 谷口明子

15 植物紀行・九 「ヤマゴボウ」 荒谷 渚

17 山の時間

「家を始末する」「7月のさようなら」 中村政子

20 鮭川村より 「与蔵と共に」 遠田旭有

23 沖家室島より

「やはり世の中で一ばん偉いのは人間のようでございます」

～宮本常一著「梶田富五郎翁」から～

周防大島沖家室で行われていた漁法 トリマワシ漁とヘイケダオシ 松本昭司

27 お山の針仕事1・2 中村鹿林

31 蚕の神様を訪ねて（七）

「語る・詠う・口説く～声の伝承と記録～」 谷口悌三

34 季節のレシピ 「黒猫のクッキー」

35 弥生神社「友の会」／編集後記

言葉と声

ワークショップ／手仕事の会／
『大祓詞』書写会／宗教・文化
講座／グリーンフケアを考える会



祈りと安らぎ 学び合いの場として

弥生神社では、『大祓詞（おほはらえのことば）』書写会をはじめ、さまざまなワークショップや「手仕事の会」、各種講座を開催しています。

毎月の書写会では、『大祓詞』の原本に紙を重ねて黙々と筆を進め、書写の後はお茶をしながらゆったりとした時間を過ごしています。

また、五節句や日本の風習にちなんだワークショップ、「手仕事の会」を季節ごとに開催しています。ご参加の方が、古来の風習を学びながら、人々が込めてきた祈りとご自分の気持ちを重ねつつ、楽しくものづくりをする機会にしていたければと考えております。

また、掛け香にする蛤や薬玉の菖蒲、リースに使うユーカリや紫陽花、熊手を飾る稲、麦など、自然の香りや手触りを感じながら作っていただこうと、素材集めから力を入れています。

これまで弥生神社の社務所にて開催しておりました行事も、コロナ禍になり「ご自宅でワークショップ」、「ご自宅で手仕事の会」として、材料や解説書を郵送でお送りする形で続けています。

『宗教・文化講座』は、今年もオンラインと会場との同時開催で、「神道を考える」、「古代エジプト人の精神世界」、「生と死をめぐって―民俗・考古編―」などの連続講座のほか、三月には昨年到现在

て、「東日本大震災によせて」をオンラインにて開催。「伝え、つなぐ祈り」をテーマにした黒崎浩行先生によるレクチャーのち、宮城県牡鹿郡女川町高白浜より、八木純子さんに、東日本大震災による当時の被害状況や、人々が集う「ゆめハウス」の立ち上げから現在までの歩みを報告していただきました。

八月には「霊を慰める―日本における死者儀礼をめぐって―」を開催。西村明先生のレクチャーから「慰霊」にまつわる実際について知り、慰霊の意味や、魂、死者との向き合い方を、新たな視点から思考する機会になりました。

そして、十月には「グリーンフケアを考える会」をスタート。葛西賢太先生より、グリーンフとは何か、どのように語られ行われてきたか、グリーンフケアを考えるにあたり、大切なこと入門的なことを教えていただき、続いて大野高志先生より、チャプレンとして患者さんと向き合うご経験を通してのお話をいただき、参加者の皆で考え、語り合う場になりました。今後も弥生神社に集う皆さまにとって心安らぐ場、学び合いの場となるよう活動を続けてまいります。

令和三年



1月 『大祓詞』書写会・ご自宅で『大祓詞』書写会（毎月開催）

2月 ご自宅でワークショップ「桃の節句と雛人形作り」

ご自宅でワークショップ「～祈りと香りを包んで結ぶ～ お守り袋作り」

3月 ご自宅でワークショップ「上巳の節句～はまぐりの掛け香作り～」

4月 ご自宅で手仕事の会「グリーンリースを作る会」

「春の御朱印帳づくり」

ご自宅でワークショップ「勾玉守りづくり」

5月 ご自宅でワークショップ「端午の節句と薬玉作り」

7月 「夏の御朱印帳作り」

ご自宅でワークショップ「紙衣（かみこ）と七夕飾り」

8月 ご自宅で手仕事の会「夏のまんまるコースター作り」

ご自宅でワークショップ「勾玉守りづくり」

9月 ご自宅でワークショップ

「重陽の節句と茱萸囊（しゅゆのう）作り—健康と厄除けを願って—」

10月 ご自宅で手仕事の会「吾妻袋を作ろう」

11月 ご自宅でワークショップ「祝箸とぼち袋を作る会」

ご自宅で手仕事の会「冬のリースを作る会」

12月 ご自宅でワークショップ「～歳神様と縁起物～熊手を飾ろう」

ワークショップ／手仕事の会

『大祓詞』書写会



宗教・文化講座／グリーフケアを考える会

- 1月 【宗教・文化講座】「神道を考える」
第6回「伊勢神宮創建伝承からひも解く古代神社の適地」
講師：加瀬直弥（國學院大學教授）
- 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
第15回「水を引き、砂を運ぶ一副葬品のはなし・5」
講師：和田浩一郎（國學院大學兼任講師）
- 【宗教・文化講座】「生と死をめぐる一民俗・考古編一」
第4回「護符（おふだ）の話1～おふだの始まりを探る中世への旅～」
講師：玉井ゆかり（宗教民俗学）
- 3月 【宗教・文化講座】「東日本大震災によせて」
「伝え、つなぐ祈り」 講師：黒崎浩行（國學院大學教授）
/ 八木純子（一般社団法人 コミュニティスペースうみねこ 代表）
- 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
第16章「天秤ばかりと黄金虫 一副葬品のはなし・6」
- 5月 【宗教・文化講座】「生と死をめぐる一民俗・考古編一」
第5回「護符の話2～祈りよ届け 庶民の信仰を探る近世・近代への旅～」
- 6月 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
第17回「打ち砕き、火を放つー古代エジプトの呪詛」
- 8月 【宗教・文化講座】「霊を慰める ー日本における死者儀礼をめぐるー」
第1回・2回 講師：西村明（東京大学准教授）
- 9月 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
第18回「大海へ還るー古代エジプトの時間概念ー」
- 10月 「グリーフケアを考える会」
第1回「グリーフケアをはじめ」
第2回「グリーフケアをつづける」 講師：葛西賢太
（上智大学グリーフケア研究所特任准教授）
第3回「悲しみにたたずむ力」
- 11月 第4回「いないけどつながる」 講師：大野高志（衣笠病院チャプレン）
- 12月 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」
第19回「オシリスを越えて～女性と死～」





日輪の中のラー神とイシス女神(左)

毒蛇と神の真名

-a Viper and the True Name of a God-

和田浩一郎 (エジプト学)

古代の日本人と同様に、古代エジプト人は発せられた言葉、文字として記された言葉は、この世界にながしかの影響を及ぼすと考えていた。このような言葉の力は「ヘカ」と呼ばれ、太陽神が誕生した時にその口から生じ、世界を創造していく際に行使された。人間は鳥のような翼や、肉食獣のような鋭い牙を持たない代わりに、言葉の力をふるうことを神から許され、その力によって地上世界を治めていくことになったのだった。

言葉の力を端的に示すひとつの例は、死者に向けた祈祷文の扱いである。さまざまな祈りの言葉は、葬儀や供養の際に唱えられただけでなく、つねに死者を助力するように、墓の壁や墓室に収める副葬品にも記された。古代エジプトの祈祷文は、死者を守るのと共に、来世での再生に導く活力を与える役割を果たした。

祈祷文は葬儀に不可欠な要素だったが、ひとつ厄介な問題があった。死者に活力を与える言葉の力が、祈祷文を構成する文字そのものにも影響を及ぼす懸念があったのである。古代エジプトの象形文字には、さまざまな生物の姿が採用されている。そのなかには、人間の脅威となるライオン、ワニ、毒ヘビなども含まれていた。これらの文字が祈りの言葉を受けて動き出し、死者に危害を及ぼすことを古代エジプト人は恐れたのである。こうした事態を避けるために彼らがとった方策は、文字が自由に動けないように、体の後半身や足がない姿で表現するというものだった。



冥界の門を守る番人たち



カバの小像
右前脚、後ろ両脚は復元

同様の処置は、墓に副葬された青いカバの小像にも見ることができ。このようなカバの像は、ナイル河が育む生命力を表現しており、死者に力を与えることが期待されたものだったが、やはり墓内で動くことが危惧された。そこでカバの像は、足のないうまくまった姿勢で製作されるか、あるいは足を壊してから墓に収められたのである。

言葉の力を示すもうひとつの例は、人間や神々の名前の扱いである。名前は相手を支配下に置くための呪術に欠かせないものだった。『死者の書』に含まれるいくつかの祈祷文は、地下世界を旅する死者の行く手に立ちふさがる、冥界の番人たちの名前を列挙している。相手の名前を知っていることで、危害を加えられることなく番人をやり過ごすことができると考えられたのである。

『ラーの真名』と呼ばれる神話には、イシス女神が太陽神ラーの本当の名前を聞き出すために、呪術で毒ヘビを作り、ラーを噛ませるといふ企みが描写されている。ラーの体内に入った毒はイシスにしか取り出すことができず、イシスは治療の代償としてラーの真名を要求する。ラーは偽りの名前を伝えて難を逃れようとするが、イシスを欺くことはできずに真名を教えることになる。世界の創造者であるラーの名前を手に入れたイシスは、以後、比類なき力を持つことになったという。

イシスが得たラーの真名は、神話の中で明かされていない。神の真名を軽々しく口にするには、死をもたらしと考えられたからである。言葉の行使が人生の行く末に深く結びついていることを、古代エジプト人はよく理解していたのである。

(文・写真／わだ・こういちろう)

声の力

森 岳人 (書籍編集者)

近頃、友人の声をとんと聴かなくなった。コロナ禍で人と会うこと自体が減ったということもあるが、ネットやスマホが普及して、用事はメールやSNSで済ませることが多くなったからでもある。以前は、何かあれば電話したり、他愛もない話に何時間も受話器を握り続けたものだった。でも、いまの若者にとつて、電話は相手の時間を奪うマナー違反のツールらしい。そういえば、仕事でも相手の顔も声も知らないまま進めることが多くなつたような気がする。いわゆる「長電話」は死語になりつつある。

つまり、言葉を伝える手段は、圧倒的に「文字」になつたのだ。それも「書く」というより、液晶画面に「入力する」という方法による。ペンや鉛筆で手書きすることは極めて少なくなつた。液晶画面に表示される文字はフォントと呼ばれ、誰が書いても同じ「字」だ。意思を伝えるツールも文字も画一化され、言葉にまとりつく個性や空気感はいふ剥ぎ取られている。この文章もきれいな書体で表現されているから、私が実は字が下手くそで、時に甲高い大声でしゃべるただのオジサンだなんて、読者は知る由もないだろう。マッチングアプリやSNS上で魅力的な若者を装うことだって可能かもしれない。

一方で、最近では「クラブハウス」などの音声メディアも人気があると聞く。考えてみると、高音質・高画質な映像が簡単に手に入るようになったにもかかわらず、ライブで生の歌声を聴きたいという需要は、減らないばかりかむしろ増えているようだ。たしかに、身体で歌声や音を浴びたいという欲求はそう簡単になくなるものではない。歌声のみならず、会話だってそんな現場の空気とともにやり取りすることに価値がなくなつたわけではないだろう。それは、言葉を音で感じ取る再現不可能な「一度きり」の貴重な共有体験だからだ。

印刷技術が普及してから数百年。印刷技術はつまるところ、コピーの技術である。コピーの技術が進化に進化を重ねた現在で、生の声や体験にも注目が集まる理由は何だろうか。文字で読める作家の生の声を聴きたいと思う人々がいるのはなぜだろう。

たとえば、誰でも入手できるコピーが氾濫すれば、オリジナルの価値が高まると言えるかもしれない。では、オリジナルとは何か。その時間その場限りでしか成立しない「一回性の味わい」だ。ヴァルター・ベンヤミンの言葉を借りれば「ア

"Like anybody, I would like to live a long life; longevity has its place. But I'm not concerned about that now. I just want to do God's will. And he's allowed me to go up to the mountain, and I've looked over, and I've seen the promised land. I may not get there with you, but I want you to know tonight that we as a people will get to the promised land."
(Memphis, Tennessee, April 3, 1968)

(誰もがそうであるように、私も長生きがしたい。しかしそんなことはもうどうでもいいのです。ただ神の意志を実現しただけなのです。主は私に山に登ることを許してくださいました。そして私は山の向こうを見渡し、約束の地を見たのです。私は皆さんと一緒にそこにたどり着けないかもしれません。でも今夜、皆さんに知っていただきたいことがあります。私たちはひとつの民として必ずや約束の地にたどり着くことを！)

Youtube (<https://www.youtube.com/watch?v=X1TJvcZFTc4>)

ウラ」である。ちなみにアウラのギリシア語の原義は、息や風のそよぎを意味するらしい。

声で発せられた言葉にも、「いま」「ここ」にしか成立しないオーラが宿る。一方、書かれた文字はいつでも読んでも同じ言葉である。声には波長があり、起伏や音量もそれぞれ、話すスピードや言葉と言葉の「間」もある。「肉声」とはよく言ったものだが、声は身体から、それこそ「息づかい」とともに絞り出されるものだ。言葉は、文字にすれば同じでも、声に出すと伝わる情報量は明らかに異なる。その意味で肉声で語られた言葉を、完璧に再現することは不可能に近い。その分、言葉に込められた魂がダイレクトに伝わるとも言えようか。その証拠を紹介しよう。

上の文章はキング牧師が暗殺される前日に行なったスピーチの一部である。Youtubeで実際のスピーチを見ることが出来る。文字だけでは感じ取ることができない凄まじい「言葉」の力を実感することができるだろう。



映像をご覧になっていただけただろうか。映像を見ずに音声だけでも、その迫力に心を揺さぶられる。当時、現場で実際にこのスピーチを聴いた人々は、キング牧師と同じく「約束の地」が見えたかもしれない。キング牧師は神の声を聴き、己の肉声をもって世の中を変える力に満ちた言葉を残した。

さて、自分の最期にはどんな言葉が聞こえ、どんな言葉を残すだろうか。

(文／もり・たけと)

*
ヴァルター・ベンディクス・シエーンフリース・ベンヤミン (1892-1940) ベルリンのユダヤ系の家庭で生まれる。文芸批評家、哲学者、思想家、翻訳家、社会批評家。33年ナチスに追われてフランスに亡命。パリで執筆した『複製技術時代の芸術』(1936)に主要な思想の一つである「アウラ」の概念を著す。写真や映画などの複製技術が、伝統的な芸術作品から「アウラ」を失わせる過程を考察し、芸術と人間の関係の変化を論じ、後のメディア論、文化産業論、カルチュラル・スタディーズといった領域に影響を与えた。第二次世界大戦中、アメリカに向う途中、スペインとの国境、ピレネーの山中で自死。主な著に『ドイツ悲劇の根源』『暴力批判論』。

本を読む。

小河洋友

(おがわ・ひろとも/図書館司書)

今回は「言葉と声」を考える5冊を選んでみました。最新の科学から、日本の古典、音楽と興味深いものばかりです。読めば新しい世界が「聴こえて」くるかもしれません。

言葉の誕生を科学する

(河出文庫)

小川洋子

岡ノ谷一夫/著

河出書房新社(2013.11)

物語を紡ぐ小説家の視点と、動物行動学・認知科学者の知見から、言葉の謎に迫る対談集です。「言葉の起源は歌である」ことから始まり、様々な動物のコミュニケーションへと話が広がっていきます。



音とことばのふしぎな世界

メイド声から英語の達人まで

川原繁人/著

岩波書店(2015.11)

本書が紹介する音声学とは「私たちがことばを話すとき、そこで何が起きているのか」を研究する学問のこと。「日本のラッパーは音声学者?」「日本語ラップの韻的分析」「秋葉原のメイド声ってどんな声?」など興味深いトピックスばかりです。



万葉集の歌とことば

姿を知りうる最古の日本語を読む

佐佐木隆/著

青土社(2021.3)

姿を知りうる最古の日本語である上代のことば。そのおもな資料は『万葉集』に収められた多数の歌であり、個々の表現やことばであるとのこと。上代のことばの多様さ、深さを考察することで、当時の人々の声が聞こえてくるような気がします。



歌声は贈りもの

こどもと歌う春夏秋冬

白井明大・辻恵子/著

福音館書店(2012.1)

童謡やわらべうたは懐かしい記憶を呼び起こします。不思議とそこでは辛かったり苦しかったりする記憶は喚起されない気がします。本書では二十四節気の季節に沿ったこどもの歌24曲にまつわるエッセイと歌詞を収録。付属とCD特設サイトで音も愉しむことができます。



ビートルズが伝えたかったこと

歌詞の背景&誤訳の深層

里中哲彦・遠山修司/著

秀和システム(2019.3)

解散後も響き渡るビートルズの歌声。今も世界中の人々を魅了しています。しかし、日本では歌詞の誤訳や曲の背景についての誤解が広まったままであるとのこと。本書ではその誤訳・誤解を検証し、新しいビートルズ像を浮かび上げられます。



言葉と声

岸田真弓

夢の中で「あんたのその笑顔が嫌いなんだよ」と男の人に言われた。病院でそこを聴くボランティアを始めた頃のことだ。偽善になりはしないか、思いが夢に現れて重い目覚めだった日、病棟に向かいながらその言葉を反芻していた。

ベッドサイドを許された女性はかなり高齢だったが、ゆっくりと静かな声で今を受け入れるしかないことを話された。諦観には聴こえなかった。「お話を伺って、自分は何をやっているのかと恥ずかしくなりました。」私はうなだれた。「そう思うのならやればいいんです。」頭上から声がした。一瞬私に発せられたとは理解できずに顔を上げた。柵の間から細い腕が出て、まるで撫でて下さるかのように手が揺れた。その手を握り、やってみますと決意と感謝をお伝えしたことを思い出す。天上から響くように届いた声はあまりにも神々しく、今も忘れない。

十年後、私の発した言葉は母の生きる力を奪った。母は膀胱癌末期の身でもなお私の嫁ぎ先の両親を気遣った。同居している私を案じる母の深い慈しみ故だとわかっていた。にもかかわらず、ある時「人のことはもういいのよ！自分のことだけ考えれば！」やりきれない思いを苛立ちに替えて私は言い放った。母は「私がしてあげられることはもう何もないのね。」と力ない声でつぶやいた。何もできなくなっても最期までできることは人を想うこと、祈ることだというのに、それすら断ち切られ、母は崩れるように悪くなった。

それから八年が経った。コロナでボランティア活動も、そもそも人と近くで話をすることもできなくなった。そのような中、義父が脳梗塞で入院した。ホームに移って四日目の六月十二日、曾孫まで全員で、ガラス越しだが三ヶ月ぶりに義父と対面。応援している言葉を大きく書いた模造紙を見せ、皆で手を振り、頑張つて！と大声を出した。いつものように目を拭く様子が見えたので隙間からティッシュを渡したが、違う滴が落ちていた。奇しくも一年前のまさにその日、夕飯後、箸を置いた瞬間に「急に足が弱ってきた。腰が痛いのに全てやってもらって感謝している。これからもよろしくお願いします」と声を詰まらせた。義父が泣いたのを見たのは初めてだった。一週間前、シヨートに行くのを見送った時だった。信じられないほど唐突に、義父の言葉で忘れられない怒りなどはもう手放そうと決めた。戻ってきて、変わらぬ日常。だが発する声の根底の気持ちは全く違っていたのが伝わったのだろう。忘れないように「おじいちゃん」と私の最終章に向けた新たな出発の日」と子供達にLINEを送ったのが一年前の六月十二日だった。面会から十日後、義父は九十八年間の人生の幕をあっけなく下ろした。

今、心の声に耳をすまします。これでよかったのか？この先どうする？…混沌の中に苦い思いが沸き上がるが、「やればいいんです。」天上から響いた声は希望の光となっている。

(文／きしだ・まゆみ)

時葉というのではないように思います。

哀しみややりきれなさは、様々な形であるとき突然襲ってきます

それでも私達は食べて眠る

生きている

生かされている

今日もまた



言葉と声

谷口明子（陶芸家）

2021年8月になったが出入国のハードルいや高く、観光レベルでは実質まだ海外には行けないから、今までの旅のいろいろな思い出したりしている。私は日本語以外だと、話せる言語はきわめてたどたどしい英語だけなので、日本語の通じないところではそれなりに不便は多かったというか立ち往生みたいなことにも多々なったが、道中（私と同様に）英語を母語としないどこかの国の人と、不如意な英語同士でやりとりすること」がなんだか好きだった。

なぜ好きだと感じたのだろうかと思うに、ひとつには、相手と意志の疎通を図るためお互いが一旦自分の本来の言語を引っ込めて、慣れない「英語」という共通の不自由を選択しているというところが、お互いに相手を（自分とは別の世界のやつだ）と認識しつつ同じ条件に譲歩しあっている状態と言え、この距離感と対等さが心地よかったのだと思う。

もうひとつは、「声」メインのコミュニケーションになっていたからだと思う。会話なのだから声メインに決まっていると言われてそうだが、「声」とは単に音声という意味だけではなく、何かを伝えようと発散されるものすべてが「声」と言えると私は思う。お互いに不自由な英語で話しているからなかなか伝わりきらず、単語を言い変えてみたり身振りをまじえてみたり絵をかいてみたり必死で工夫する。相手も、この人は何を伝えようとしているのだろうか、必死で読み解こうとする。こういうことが「声」のやりとりだと思う。つまり、たとえ筆談であっても、そこに「声」は発生しうる。

以前アマゾン川流域の先住民族のドキュメンタリーで、絶滅の危機に瀕したある種の生存者がついに二人だけになり、片方が死んだらその種の言語を解する人間は世界中で一人だけになってしまうという話があった。当時はその残った一人の想像を絶する孤独を思っただけ揺らぐような絶望的な気持ちだったが、それでも、言語そのものが通じなくても「声」ということがある以上、その最後の一人にも、他と伝わりあう一縷の回路は残されていると言えるのではないかと、今は思う。一方で、母語同士のやりとりのように、発される言葉そのものの意味内容はすべらかに理解できる場合でも、そこに「声」の応酬が含まれない場合、実質的にはほぼ断絶に近い状態になってしまうのだと感じることもあり、自分の中に問いが無限に増える。



(文・写真／たにぐち・あきこ)

2014年 カンボジア

ヤマゴボウ



荒谷 渚

幼い頃にお気に入りだった、とある木の実の絵本があります。女の子が森の動物達と一緒に、食べられる実や飾りや遊びに使える実などを、温かみのある可愛らしいイラストで紹介してくれる絵本です。今でもナッツやベリーが好きで、森での暮らしに憧れがありますが、思えばこの絵本が原典の一つなのかも知れません。

大人になり、絵本の内容は殆ど忘れてしまいましたが、一つ鮮明に記憶に残っている実があります。ページをめくっていると突然、「毒です！食べてはいけません！」というドキッとする文字が目に入り、その中に載っていた植物の一つ：「ヨウシュヤマゴボウ」です。

「洋種」というだけあり、元は北アメリカ原産の植物で「アメリカヤマゴボウ」とも呼ばれます。根っこが野菜のゴボウに似ているためこのように呼ばれますが、同じ仲間ではなく、有毒なので食べられません。山野や街中でもよく見られる帰化植物なので、名前は知らずとも見たことはある

という方も多いかもれません。夏に小さな白い花を咲かせ、秋になるとブドウのような房状の果実をつけます。この果実が実にカラフルで印象的で、ピンク色の枝に黄緑から黒に近い青紫色の実がグラデーションとなって連なります。

そんな可愛らしい、見つけたらつい摘みとって家に持ち帰りたくなるような見た目とは裏腹に、まさか毒があるなんて…。そんな二面性がどこか裏切られたようで衝撃的だったのか、やはり見た目にそぐわないその名前と共に、幼い私の記憶に強く残りました。

実際には、果実の部分には毒が少なく、鳥が食べることで種子を運びます。熟した黒い実の果汁は染料のように色が濃く、英語では 'ink berry' (インクベリー) とも呼ばれるそうです。

危なさの度合いには差があれど、毒がある身近な植物は他にも沢山あるので、身を守るためには勿論、うる覚えな絵本の知識では不十分なのですが…。少なくとも私はあの絵本のおかげで、今までヨウシュヤマゴボウを食ってしまうことはありませんでした。時々街中で育っているのに遭遇すると、今でもあの「毒です！」の文字が自然と思い浮かびます。ブルーベリーに似たその果実も、少しも美味しそうとは思えません。

私の小さな恩師であるその絵本は、現在も自室の本棚の隅でひっそりと眠っています。

(文・絵／あらたに・なぎさ)

山の時間

中村政子



板葺き屋根

家を始末する

3月末に職を辞してから、家にいる時間が長くなった。家にいると、人と接する機会は断然少なくなる。庭に出ても視界に人の姿は入らない。人の声を聞くことも滅多にない。たまに車の音は聞こえてくるが、あとは自然界の音や声ばかり。

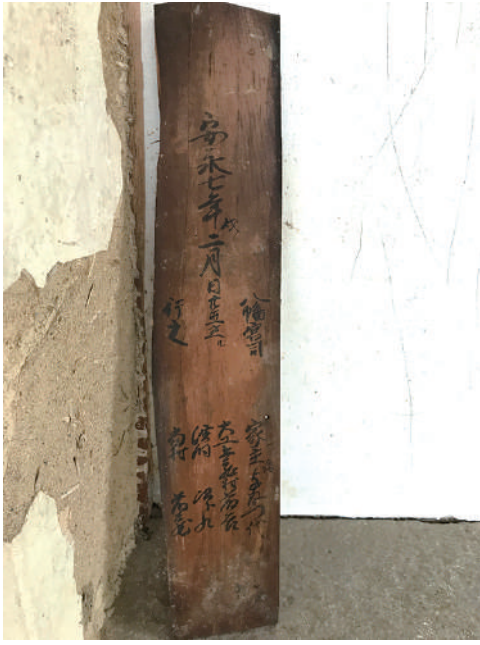
隣には昨年まで、30年以上前にこの地に移住してきた高齢の夫婦が住んでいた。庭に立つところうじて視界の隅に入る家だ。昨年7月の大雨で避難勧告が出たのを機に、この夫婦は村の中心部にある公営住宅に引っ越していった。空き家になった家は、隣町に住む大家が自分で取り壊し、今では更地になってしまった。

隣家の大家のヨシオさんは、若い時から山で仕事をしてきた人だ。山仕事に入る人たちは、たいいてい班を組んで、請け負った山の伐採や下草刈りなどの仕事をする。その班の中でも一番厳しいと評判の班で仕事をしてきた、とヨシオさんは言っていた。「なめとこ山の熊」の淵沢小十郎のような、ごりごりしたおやじという表現がピッタリだ、とヨシオさんを見ながら密かに思っている。

重機も自分で扱うヨシオさんは、連日隣町から通ってきて、早朝から一人でどんな家を解体していった。屋根を覆っていた金属板をめくると、板葺き屋根がそっくり昔のまま現われた。昭和40年頃に消えてしまった風景である。昔ほどの家も、栗の木を10 x 30 cmほどの板切れにしたものを瓦のようにならべ、その上に木を渡し、石を何カ所かに置いて栗

板を押さえていた。剥き出しになった栗板の並ぶ屋根は、二度と目にすることはないだろうめずらしい景色であった。

また解体中に屋根裏から出てきた棟札には、安永7年（1778年）という年号と施主である当時のご先祖様の名前が記されていた。200年以上もの間、子孫を守り育ててきた家が、七代目の子孫の手によって役目を終えることになった。今年77歳になるヨシオさんは、自分が元気なうちに家を始末したいのだと言った。解体された木材は、山中だけに実に立派なものが使われていて、壊してしまうのがもったいないようだ。まだまだ人が住むに十分耐えうる家だが、その隣には人の住まなくなった空き家が、荒れ放題になって残っているのを見れば、ヨシオさんの決断も頷ける。家ばかりでなく、すぐ近くにあるお墓もすでにきれいに整えられ、これから所有する山林の枝打ちや間伐といった手入れをするつも



棟札

りだそうだ。そうしてからあっちに行くんだ、とヨシオさんは空を指さした。彼は庭に大きな穴を掘り、ボンボン木材を投じて燃やしていった。集落内の何軒かがストーブや風呂釜の焚き物用としてその一部を分けてもらった。役目を終えた家は、最後に集落の私たちの冬を暖めてくれることとなった。自分の手で家の始末を済ませたヨシオさんは、更地になった屋敷跡にサクラの苗木を3本植えた。

7月のさようなら

6月に入ると毎年、谷の底からめずらしい声が聞こえてくる。ヒョロロロという少し気の抜けたような鳥の声。アカシヨウビンの声だ。今年は例年より少し早くやってきた。アカシヨウビンの声を聞くようになったある朝、前夜にてんかんの発作を起こした犬のようすを見に行くと、寝床がもぬけの殻。つないでいた綱の先端の首輪が、主を失って地面の上に丸く落ちていた。

周囲を歩いて探してみたが、姿は見えず。以前にも同じことはあったが、その時は家の周りをウロウロしていた。近所の友達に助けを求めて一緒に探してもらったが、どこに行つたものか見つからなかった。山の斜面を何度も上り下りしてヘトヘトになったところで、自力で帰ってきてくれるのを待つことに決め、家に戻ることにした。

それから1週間、もう帰らないかもしれないと諦め始めていた時に、一緒に探しにいった友達から電話がかかってきた。彼の知人が集落下の川に釣りに行ったところ、河原に動けなくなっている犬がいたというのだ。早速、一緒にそれと思いき河原に探しに行った。二人でしばらく河原やその周辺の山の斜面を、名前を呼びながら歩き回ったが、出てくる気配はなかった。連絡をくれた彼の知人は、脚をケガをして動けなくなっているのかと思い、パンを置いてきたよと言っていたそうだ。「パンのおかげで少し体力が回復して、まだどこかに隠れているだろう。この辺りにいることはわかったから、また通ってくれば会えるはずだ」と励ましてくれる友達の声に、その日は希望と落胆を感じながら引き上げることにした。

翌朝、エサと首輪とリードを持って、明るくなると同時に çıkてみた。昨日と同じ場所にやはり姿はなく、エサを置いて今度は対岸に行ってみることにした。対岸に渡ってさつき行つた川向うを見やると、何かしら白い三角のものが大きな岩の間に見えた。昨日も白っぽい木やら石やらを動物の体と見間違えることがしばしばあったので、半信半疑で目を凝らしていると、その白い三角がかすかに動いたように見えた。さらに目を逸らさずにいると、今度は確かに動いた。

駆けつけてみると、じつと動かずに白い犬が待っていた。衰弱しているせいなのか、それとも発作の後遺症のせいなのか、しつぽを振るでもなく、目を輝かせるでもなく、ぼーっとしているように見える。目の前にエサを置くと食べる。食べ終えると、河原の石ころの上をフラフラしながら歩き出し、川の水を飲む

だ。心配していた脚もケガはなかった。また少しエサを食べ、水を飲む。何度かそれを繰り返しているうちに、歩く足元がだいぶしつかりしてきた。しばらく河原を歩くにまかせ、持参した首輪とリードは付けずにおいた。私の後をついて歩くようになったところで、車まで行きドアを開けると自分から乗り込んだ。やれやれ、ほっと安堵の息をつくことができた。これがわが家の犬の行方不明事件の顛末である。しかし、無事の帰還を喜んだのもつかの間、それから2カ月も経たないうちに更なる別れを告げることになる。7月半ばにまた発作を起こし、今度はそれが命取りとなってしまった。

3年前の夏祭りの翌日、仕事場の近くをウロウロしていた迷い犬がわが家の犬になった。うちに来てからも、しばらくは元の飼い主が迎えに来るのを待っているかのように、遠くを眺めていることが多かった。新しい飼い主である私にはかろうじて慣れてくれたものの、他の人間になつくことはなかった。まあ、そうでなくとも訪れてくる人も通りかかるとも少ないのだから、それは仕方がないのかもしれない。飼い犬と主人という関係でも、どこか埋められない距離を感じる関係だったように思う。それがてんかんという持病のせいなのか、飼い主に一度捨てられた経験によるものなのかはわからない。どこか寂しさのある犬だった。

あれからまだあまり時間の経っていない今は、思い出すと胸が痛むばかりだが、病の苦しみから解放されたことだけは確かだよね。さようなら、さんちゃん。

(文・写真／なかむら・まさこ)

鮭川村より



秀林寺遠景

与蔵と共に

遠田旭有

(秀林寺住職)

昔々、与蔵という若者が、友人と峠で炭焼きをしていました。お昼どきに与蔵は沼で捕れた魚を友人の分も食べてしまいます。すると喉が渴いてたまらなくなりましたので、沼の水を飲み続けました。ふと気づけば与蔵は大蛇に。蛇になった身では帰れないと家族に別れを告げ、与蔵は沼に潜っていったのでした。それ以来、その沼を与蔵沼、沼のある峠を与蔵峠というようになったのです。

* * *

車で山間部の集落を通り抜ける時に「どこに買い物に行くのだろう」「若者はいるのだろうか」という思いが頭をよぎります。私が住んでいる鮭川村はそういう感じの山間部の小さな村です。

先の話はそのような村に伝わる与蔵沼の伝説で、長らく村の人たちが語り継いで来ました。

國學院大學名誉教授の野村純一先生と敬子先生ご夫妻は、鮭川村の昔語りを『五分次郎』という書籍にまとめられました。もちろん与蔵の話も収録されています。

数年前に『五分次郎』収録の与蔵沼話を参考に紙芝居を作成しました。私も携わり絵を描かせて頂きました。野村敬子先生か



蛇になった与蔵



ブナに囲まれた与蔵沼

ら「蛇になった与蔵がかわいい」と好評を頂きホッとしています。

ちなみに与蔵沼は実際に存在する沼で、与蔵峠はかつて最上地方と庄内地方を結ぶ道でした。

現在、この周辺は絶好のトレッキングコースになっています。自然や環境に恵まれた所で、とりわけ見渡す限りブナブナブナのブナの原生林には心の底から魅了されます。

毎年、トレッキングツアーが開催され、村内外から多くの方が参加されます。私が参加した時は、あいにくの小雨模様でしたが、かえってブナの緑が映えてとても幻想的でした。

そして、今年になって村の若者たちから新たな試みが提案されました。山道を走るトレイルランというスポーツを与蔵峠でやるということです。その名も「YOZO PROJECT」。参加したプロの方からは「東日本屈指の素晴らしいルート」と絶賛のお言葉を頂きスタッフ一同鼻が高くなりました。

かつての与蔵沼の話には、欲を出すことへの戒めや、この沼で魚を捕ることの禁忌など、やや説教じみた印象がありました。

ところが今や与蔵沼は、村を知り、村を楽しみ、村で人との繋がりを作る重要な要素になっています。



与蔵沼の魚たち 食べると蛇になる!?



与蔵の日の出と雲海



山形県鮭川村



YOZO PROJECT メンバー

与蔵は関わり方を変えながら村人と共に歩んで来ました。まさか与蔵も「YOZO」と表記される時が来るとは思ってもいなかったのは。沼の底で与蔵もきつと目を細めていることでしょう。これからもどのように関わっていくのかわくわくしています。

ところで、与蔵の話は蛇になり家族と別れて生きねばならなくなつた男の話にしては悲愴感がありません。恐らくそれは「ヨゾウ」という響きに理由があります。

「ヨゾウ、ヨゾウ、ヨゾー・・・」と口にしてみると、この名の持つある種の愛嬌と親しみやすさを感じます。そして、何よりも呼びやすい。この名にも、村の人たちが親しんで来た理由があるのではと思わずにられません。

(文・絵・写真／えんた・きよくゆう)

「やはり世の中で一ばん偉いのは人間の
ようでございす」

宮本常一著「梶田富五郎翁」から

周防大島沖家室で行われていた漁法

トリマワシ漁とヘイケダオシ

松本 昭司



小水無瀬島（こみなせじま） 沖家室島の属島。沖家室島の南の沖合に位置する無人島。かつて、ここで渡り鳥のヘイケダオシ（アビ）によるトリマワシ漁（アビ漁）がおこなわれていた。

提供：藤本正明

現在の広島市西区はかつて広大な干潟があった。そこを埋め立てて現在の西区商工センターがある。どのあたりかというところ、イズミ系大型ショッピングセンターLECTと言えば地元の人ならわかりやすいだろう。埋め立て面積は三二八万平方メートル。東京ドームの面積四万六、七五五平方メートルに換算すると約七十個分という広大な面積。

はい話が貴重な干潟が消失したのである。

その埋め立てで一九八七年に（財）海と島の博覧会協会が主催となって「海と島の博覧会」が開かれた。僕は当時三十二歳。三十歳の時に防波堤から転落事故を起こし、左大腿骨の骨折をしてしまった。リハビリを兼ねて妻に手を引かれて会場へ赴いた。

三十歳を機会に、広島から周防大島町の最南端の故郷である沖家室島にUターンをした。その矢先の事故だった。Uターンの曉には漁師になるつもりだった。

海と島の博覧会。通称「海島（しま）博」。瀬戸内の未来を創造する博覧会に期待を寄せた。巨大な会場は遊園地だった。数々のパビリオンがあった。瀬戸内の未来を創造するような内容に出会った記憶はない。

ひとつ目に留まったのがアビである。この海島博のマスケットに使われていた。僕はアビという鳥は知らなかった。アビは渡り鳥である。広島県の県鳥にも指定されている。広島県ではこのアビを利用した伝統漁法があることをこのとき初めて知った。

アビは瀬戸内海へ毎年冬になるとやってきて、春になるとシベリアなどの繁殖地に帰って行く冬鳥という。越冬のため瀬戸内海に渡来してきたアビは、餌であるイカナゴを捕まえようと、イ



渡り鳥のヘイケダオシ（アビ）潜水することもできる。

提供：(株) フォトライブラリー

カナゴは逃げ回って群れをしながら海底にもぐる。このとき海底にひそんでいるタイヤズズキもイカナゴを追いかけて水面に移動して来る。漁師たちは、このタイヤズズキをイカナゴを餌にして釣り上げる。この漁法はアビ漁と呼ばれ、少なくとも三〇〇年以上前から続いていた古い漁法。これが僕にとって最大の収穫だった。

海島博が終わり、しばらくして会場があった商工センターを車で走った。すっかり建物はなくなり、広大な広場だった。その中でひとつポツツリと、金属製の円錐が残されていた。記憶にある。これが海島博のシンボルタワーではなかったか。中に入って見上げた記憶もある。

ここは広島湾。かつて広大な干潟だったはず。ここを生業（なりわい）にした漁業者はどうしただろう。貴重な干潟を埋め立て、人を海から遠ざけることになんの意味があるのだろうか。後から知ったのだが、このシンボルタワーは元陸軍ふ頭のあった宇品の一万トンバースに移設されたそうだ。瀬戸内の未来を創造すると期待した海島博。今思えばあの子どものたちの歓声やきらびやかなパビリオンは

蜃気楼であり、埋め立て地を覆い隠す砂上の楼閣でもあった。

僕は島に帰って漁師である父に、「アビって鳥、知っちゃる？」と聞いたら知らないと言う。そしてアビ漁のことを説明すると「ああ、昔そういう漁をしていたらしい。その鳥はウワメじゃ」。それから宮本常一の著作などを読み進めていくと意外なことがわかった。アビのことを沖家室ではウワメもしくはヘイケダオシといい、アビ漁をトリマワシ漁という。これが面白い。これは僕の推論だが、この沖家室から本土に渡り、道の駅のある長崎地区の反対側の海沿いに船越という地区がある。そこに小高い城山（じょうやま）と呼ばれる山がある。史書『吾妻鏡』によると、ここはかつて平知盛の居城があったと言われている。源平最後の合戦となった壇ノ浦の合戦の前夜である。ここから出陣したのである。

そういうこともあるのだろう。この地区には宮島様を祀った赤い鳥居が結構ある。そもそも宮島様は女の神様で海を渡ってきた。福岡県宗像市にある宗像神社を出た三女神は周防大島の西にある平郡島に上陸したものの、そこに七つの浦がなかった。「ここはイヤじゃ」と出て行った。その場所を今でも五十谷（いや）と呼ばれている。その後、この周防大島の小島にやってきた。すると島が揺れたというのだ。「この島は生きておる」と言って出て行った。そこを生島（いきしま）と呼ぶようになった。場所は道の駅から大島大橋に向かって五〇〇メートルくらいの道沿いから海の方をみると赤い鳥居があるからわかる。僕が中学生のころまでは離れ小島であったが、今は埋め立てて陸続きとなっている。

その後、宮島様は安芸の国の厳島へ渡り平清盛によって厳島神社が建立されたのである。ここには宮島様が所望された七つの浦があった。七浦を讀えたこんな歌がある。

「安芸の宮島まはれば七里、浦は七浦七恵比須」

「ご丁寧にも、宮島航路のフェリーの名も「ななうら丸」なのである。沖家室島周辺で捕る魚の名も興味深い。身体に槍をまとったミノカサゴをキヨモリと言う。コシヨウダイをトモモリ。そして平家蟹。壇ノ浦に至っては、鯛を平家魚といい平家に礼を尽くして正座をして釣るといふ。源氏の名をつけた魚はいない。つまり、ここは平家びいきなのである。世の中にはチョー美男子の源義経に対して清盛はいかにも憎々しい顔をして登場する。九郎判官義経、つまりなにかと判官（ほうがん）びいきに対してここは平家びいきなのである。

さて、アビのことをこの島ではヘイケダオシという。これはどうやら源平合戦になぞらえたのではなからうか。そして漁法のトリマワシとは鳥回しなのだろう。父に聴くと、棒の先に布を巻き付けてイカナゴを追い込むんだそう。いやいや、これもあとから分かったのだが、夜になると船でイカナゴをすくいにいくのである。明かりを灯すとイカナゴが寄ってくるのをすくうのであって漁法ではない。このトリマワシは他の意味でも使われる。「今度悪さしたらトリマワシてやる」。懲らしめてやるという意味。語源はイカナゴをヘイケダオシが追い回すことから来たものだろう。

東和町誌漁業誌に興味深い聞き取り調査が掲載されている。このトリマワシ漁がおこなわれるようになったのは明治八年（一八七五年）ころだという。今から一四六年前のことだ。イカナゴは冬になるとこの島の沖にある千貝瀬や大水無瀬小水無瀬、弥左衛門瀬などの砂州に群れを成してくる。ヘイケダオシもまたこれを好んで集まって来る。このとき島の漁師は一斉に漕ぎ出し、節分から夏のはじめころまでに一年分に相当する水揚げをした。だからヘイケダオシをとっても大事にしたそう。ヘイケダオシも舟に慣れっこになっ

ていて、手を伸ばしても恐れることはなかったという。

ところがとんでもない事態が起こる。明治一九年月に大島から海鳥を撃つ猟師が舟に載って現れた。その発砲音でヘイケダオシは逃げてしまった。毎年やってくるので島民はやめてもらった。そして今度は明治二十四年には近くの船越村と油宇村から鉄砲撃ちがやってきて、漁にならなくなった。この漁は二か月が山である。しかも荒れる日も多い季節でもあった。そこで、禁猟にするように県へ願い出て明治二十八年に禁猟区が確定した。山の猟師が舟で海にきて鉄砲を撃ち、漁場を荒らすとはなんちゅう物騒な話である。当時、県に願い出た文書が東和町誌に掲載されている。読むとその切実さが伝わってくる。付録に載せた。

このトリマワシ漁は昭和のはじめころまで続けられたそう。広島県のホームページによると三〇〇年に及ぶアビ漁は広島県豊田郡豊島周辺にわずかに残っていたそうだが、昭和六十年代に消滅したと書かれてある。その原因はイカナゴの減少と指摘している。その原因は明確であろう。イカナゴの生息地を潰したからである。瀬戸内の干潟を含む海岸線は埋め立てでほとんどが原型をとどめない。この島周辺でもイカナゴが湧くようにいた。子どもころの記憶でも、夏に潮が引いた砂浜を素足でこぶると足裏がゴニョゴニョとうごめいた。イカナゴが夏眠しているのだ。それが今ではほとんど見当たらない。春にはメバルの食いが立つ。イカナゴが回遊してくるからだ。漁師も夜になると船でイカナゴをすくいに行ったものだ。それがパタツといなくなったのは、片添ヶ浜のリゾート開発で、人口の浜にしたときと時期が重なると漁師は指摘する。それが直接の原因かどうかはわからないが、無関係ではあるまい。

瀬戸内海の高砂採取はコンクリートなどの建設資材用に一九六〇年代から始まった。広島県では九十七年、区域外操業や許可量を無視した超過採取など違法操業の実態が次々と判明。瀬戸内海全体の採取量は約六億立方メートルと推計され、失われた海底の環境回復が大きな課題となっている。これを契機としてイカナゴの回遊が消滅した。

宮本常一の代表的な著作「忘れられた日本人」の中に収録された「梶田富五郎翁」。僕が一番好きな著作である。ここには明治九年に七歳で対馬に渡った富五郎少年の半生が描かれている。

大島郡久賀（現在の周防大島町久賀）で生まれた富五郎少年は幼くして両親をなくした。みなしごとなった子どもはメシモライといつて舟に乗らされたと言う。対馬に上った富五郎はそのうち漁師になった。ところが島に溶け込むにはたいへんに苦労したそうだった。若者になるころは沖家室からも漁師がたくさん来るようになった。ブリをたまげるほど釣り、腕も良かったそうだった。こつこつと入り江を拓き、港をつくった。沖家室の漁師が来たころは四、五隻しかとめられなかった港が、大正時代には五〇〇隻もとめられる港を築くまで三十年かかったという。潮が引いたときに舟と舟の間に石を吊るし、潮が満ちてくると移動して石を落とす。こうして長い年月をかけて港を築いたという有名な話はこの中に収録されている。

そして富五郎翁はこう言うのである「やっぱり世の中で一ばん偉いのは人間のようにでございす」。宮本常一が富五郎翁から話を聞いたのは昭和二十五年七月下旬とある。それから七十年余り。「いったい進歩とはなんであるうか」と言った宮本常一の言葉が胸に迫ってくる。博覧会と称した巨大イベントはさながら砂上の楼閣であった。海は人の暮らす場所からはるか遠くに追いやられた。長く続い

た伝統漁法は鉄砲で荒らされた。豊かな干潟は跡形もない。環境は破壊され、日本の沿岸漁業は風前の灯だ。人々の暮らしは便利にはなったが、果たして豊かな暮らしと言えるのだろうか。

周防大島から対馬に渡った人々は三十年かけて港を築いた。今の人々は三十年かけて海そのものを壊した。

「やっぱり世の中で一ばん偉いのは人間のようにでございす」と富五郎翁はいつたが、一番バカなのも人間のようにでございす。

（文／まつもと・しょうじ）

〔東和町誌漁業誌から 抜粋〕

〔禁猟区域設置の歎願書禁猟制札建設方ノ儀二願本郡家室西方村ハ戸数二千余 人口一万余ニシテ 其生産職業ハ重二農トニシテ 専ラ漁業ヲ職トスルモノ大宇沖家室島全島民大宇外入村及大宇地家室ハ各員三分ノ一ニシテ 漁業ニヨリテ生活スルモノ千戸ヲ降ラス 然シテ其漁ヲナス漁場ヘハ (中略) ヘイケダオシ鳥銃殺後ノ景況明治十九年三月玖珂郡大島村ノ猟師三四人来リ銃ヲ以テ捕獲セリ ソレヨリヘイケダオシ島ノ来ラザルコト七日同二十一年三月同村ヨリ来リテ捕獲ヲナサントセリ 其際ハ各漁業者一同事情を延ベテ相談シ 同二十四年三月 本郡大宇船越ノ猟者来リ 三四度発銃セシニヨリ 種々事情ヲ陳述シテ相断ル 其節同島ノ来ラザルコト五日同二十四年三月重ネテ本郡油宇村ノ猟者四人来リテ発砲捕獲ス 其節同島ノ来ラザルコト六七日 明治二十八年十月十八日 山口県大島郡家室西方村 大谷亀助 (漁業者全員の署名捺印 省略) 山口県知事 大浦兼武殿禁猟区域の確定本村大宇沖家室島千貝礁及ヒ小水無瀬ヘ禁猟制札別紙写ノ通下附相成候条 此段及報告候也 明治二十八年十一月廿日 家室西方村役場 大島郡役所 第二課御中〕

お山の針仕事・1



©Karin Nakamura

—Karin Needlework—



Karin Needlework の看板 (屋号)

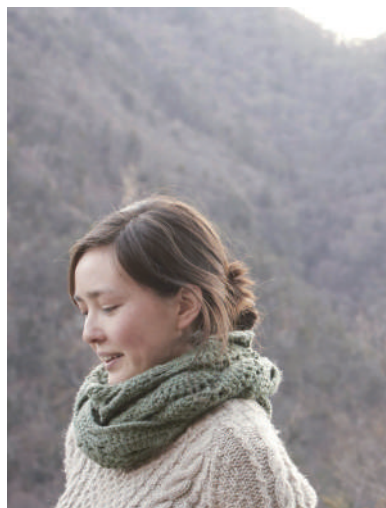
右ページの作品は、王立刺繍学校での最初の課題。

はじめまして。Karin Needlework 中村鹿林です。
長野県大鹿村の小さな集落に住みながら、刺繍の作品をつくった
り教室をひらいたりしています。それから編み物も好きで毎日何か
編んでいます。家には山羊、鶏、猫、加えてもうすぐ二才になる息
子がいて、賑やかですがのんびりとした生活を送っています。

小さい頃からクロスステッチなどをしていましたが、本格的に刺繍を始めたのは高校卒業後に父の故郷であるイギリスに渡ったときです。英国王立刺繍学校に通い、イギリスの伝統刺繍の技法を学びました。

他にもイギリス滞在中には叔母にクロッシェ（かぎ針編み）を教えてもらったり、数か月デンマークに飛んで手工芸学校へ行ったりして、色々な手工芸を学ぶ機会がありました。ヨーロッパの工芸は華やかながら優しい色の組み合わせが多く、見てもやっても楽しいものでした。五年ほど経ったところで、やっぱり南アルプスの山が恋しいと帰国し今に至ります。

ヨーロッパの暮らしの中のアイデアを取り入れたり、長野の山奥の自然をモチーフにしたり、作りたいものを作ってみる毎日です。生活を彩り、季節を感じられる作品をみなさまに紹介していきたいと思っています。



Karin Needlework

<https://karin-needlework.tumblr.com/>

Instagram : @karin.needlework

お山の針仕事・2



©Karin Nakamura

— Karin Needlework —



ヤギの食べ残しをいつも狙っているニワトリ



Karin Needlework 中村鹿林です。今回の作品は、キャンバスワークという技法を用いてつくったニワトリです。キャンバスワークとは、目の粗い生地に、布目を数えながら規則的な模様を刺して描いていく刺繍です。

わたしはこのキャンバスワーク刺繍が好きなのですが、もっと好きなのがニワトリです。刺繍のデザインにするのにうってつけであり（鳥全般図案にしやすい）、何よりも本物が可愛いのです。家では七羽ニワトリを飼っていてよく観察をします。ポンポンとふくらんでいるおしり、たまに首を傾げるところなど、ずっと眺めていられる面白い生き物です。

そんな我が家の小さな牧場に最近仲間入りしたのが、ヤギの赤ちゃんです。乳用に飼い始めて三年目の母ヤギが、四月の中旬に産みました。オスとメス一匹ずつで、それはもうたまらない可愛さです。人懐っこく、近くに行くと寄ってきてスリスリしたり、指を噛んだりしてきます。歯もまだ小さいので全く痛くありません。嬉しそうなききはしっぱをピンピン振ります。近頃はやんちゃをするようになり、ニワトリたちは追いかけることも。そんないとおしい仕草や場面を刺繍で表したいと思うけれど、なんせヤギはまず絵に描くのが難しいのでなかなか図案にできません。いつか良いアイデアを思い付くまで待ちます。

寂しいことに、子ヤギたちを家で飼うのは夏までです。夏になると二匹とも出荷します。長野県の南信地域では毎年山羊市場というのが開かれ、全国の牧場などから買い付けにやってくる人がいるのです。それまで、美味しいごはんをたくさん食べさせてあげるのが仕事です。



*「お山の針仕事 1・2」は、令和二年発行のオンライン版「弥生だより」一号二号に掲載したものです。

カイコ

蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

(映像作家／民俗研究者)



(七) 語る・詠う・口説く・声の伝承と記録



観浄寺の金色姫木像

「部屋の中にはお蚕さまの棚が
いっぱい人間はその隙間で寝
てた。風呂に入ると馬の鼻がす
ぐそこにあった。ヤギも飼って
たし、そんな家で暮らしてたよ」

それは平成二十九年に伊那市
の観浄寺で調査をしたときに区
長さんから聞いた話で、たくさ
んの生き物に囲まれた暮らしぶ
りが伺えて印象深かった。民俗
学ではそうした生きた言葉の聞

き取りがとても大事なのだ。しかし、そんな暮らしだったと楽しく回
想してくれるばかりではなく、「大変だったからもう思い出したくも
ない」という言葉に触れてうろたえることもある。「そんなこともあつ
たかねえ」と昔話に咲いた花もすっかり枯れてしまったようにそっけ
なくあしらわれることもある。戦前戦後くらいまでの養蚕農家の実態
をうかがうことはもはや困難になってしまった。でも、その暮らしは
かけがいのないものだし、多くの生き物の命とともにあったその言葉
に触れることは供養にもなるのではと思っている。



「四月二十三日の夜、本堂でコカゲサンのお念仏をした。集まるの
は養蚕農家の主婦が多い。寺の檀家とは限らない。お念仏のあとおこ
もりをした。お札を出した。余興に芝居をやったこともある。このお
念仏は、昭和三十年代までやっていた」



護符と信州らしいお茶うけのご接待をいただいた

これは昭和五十五年(1980年)に神奈川県相模原市の正泉寺住職から聞き取った記録として残っている。「コカゲサンのお念仏」というのは、「蚕影大権現御和讃」のことで、現在は復活されて例年五月十五日に行われている。和讃とは、七五七五の音で整えられた句に節回しをつけて唱える(詠う)もので、仏様やその教えを讃える歌。仏事では主に女性信者が御詠歌や和讃を担うことが多いと思う。「コカゲサンのお念仏」でも養蚕に従事する女性たちが主役だった。ここでは「ごりやくさーずけ たもうらん なむありがたや こかげそん」と詠われる。

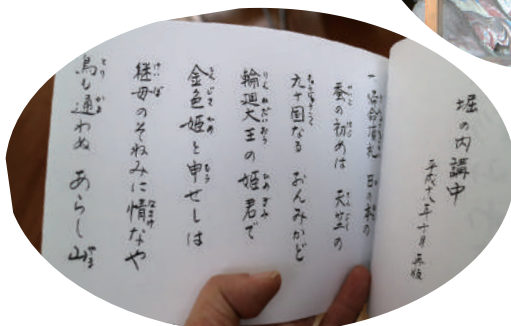
蚕影山はカイコの神様である金色姫を祀る蚕影神社から江戸時代後期に勧請されたようだ。



蚕影大権現の馬乗り木像



阿弥陀堂の内外に集まって詠う



かつて念仏講は金色姫の社殿前にゴザを敷いてやっていた

相模原市の堀之内自治会館には蚕影山神社が祀られていて、年に二回「念仏講」が開かれる。やはり女人講で、かつて養蚕をしていたという地域の女性が集まってくる。こちらの「蚕影山和讃」では、金色姫伝説を連綿と詠うという長いものだが、「唱えているうちに思い出すのよ、昔しっかり仕込まれたからね」という。もちろんお導きに感謝を捧げるものだけど、これから春蚕を始めるにあたり養蚕の知識を学ぶとともに心得を説く実務的な教育の側面があって、生業と結びついた信仰の特色といえる。読み書きができない人の多い時代に声で伝承することは、学びであり楽しみでもあったのでしよう。



瞽女（ごぜ）と呼ばれる女性の盲人芸能者がいて、手引きのマナージャーとともに門付しながら各地を巡業していた。三味線の弾き語りをする瞽女唄（ごぜうた）には様々なレパートリーがあったようで、その中に「蚕口説（かいこくどき）」がある。養蚕農家で蚕に聞かせる唄だそうで、「蚕棚の前で歌ってもらうと堅い繭ができる」といわれた。東京都足立区に住んでいた瞽女の歌が記録されている。明治後期から昭和初期ごろと思われるが、その歌詞の一部を引用すると、

〔前半省略〕しきい前なるそ
 なたであれば、桑をたくさんく
 れねきゃならぬ、繭を作らにゃ
 そのぶにおかぬ、そこでおこう
 が 申せしことに、桑をたくさん
 食わたしたならば、繭を十分作
 りましよう、しかく積りてそ
 の繭見れば、一枚ばきにて 早や
 二十九枚、あとのまぶしが 三十
 と二枚、これを見る人と 聞くひ
 とびとが、むほん蚕を いたすが
 よいと、蚕影山とて その名も高
 き、蚕繁盛 末繁盛よ、うたいか
 なりて、オサおめでたい サーエ

「まぶし」というのは繭を折り込んだシート状のもので、それに成長したカイコ（熟蚕）をのせて繭を作らせた。その枚数が多いほど豊作とわかる。「しきい前」というのは、熟蚕になる前のことだろう。

養蚕農家の娯楽ではあったが、一曲いくらの謝礼が必要なので、生活に余裕がないと頼めないかも。それでも、「その名も高き蚕影山」の加護があると聞いたら、カイコもがんばろうと力が湧いてくるのだ。魅惑的な声には、蚕も人もその気にさせる呪力があるのでしょうか。

（文・写真／たにぐち・ていぞう）

シルク民俗研究会カイコローグ

HP: <http://www.kaikologs.org/>



蚕棚（羽村市立郷土博物館）



5 齢に成長したカイコ



黒猫のクッキー



ブラックココアを練りこんだほろ苦く柔らかいクッキー。ほのかな塩味がポイントです。

(クッキー生地)

バター 100g

卵黄 1個分

グラニュー糖 70g

薄力粉 150g

ブラックココアパウダー 17g

塩 1g

※下準備

バターはすつと指が入る程度まで室温に。薄力粉は冷蔵庫で冷やしておきます。

バターに砂糖・塩を加えてすり混ぜます。卵黄を加えてさらに均一になるまで混ぜ、薄力粉・ココアをふるい入れ、そぼろ状になるまで切り混ぜます。①

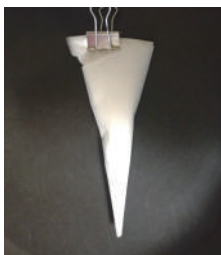
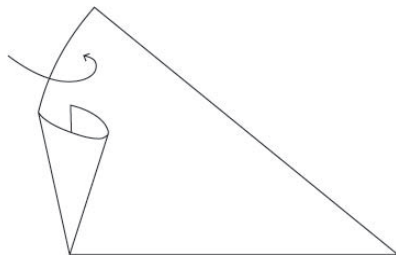
手で軽く捏ねるようにならめ、大きめのビニール袋に入れ②、あとで伸ばしやすいよう平たく潰して、冷蔵庫で一時間以上寝かせます。(このまま冷蔵保存も可能です)

※オーブンを180度に予熱しておきます。ビニール袋に入れたまま2〜3mm程度の厚さに伸ばします。袋を切り開き、型で抜きます。※硬く伸ばしづらいようなら少し室温に・柔らかく扱いづらければ冷蔵庫に入れ固さを調節します。

オーブンシートを敷いた鉄板に並べ③、12〜15分程度焼きます。冷めたら好みでアイシングを絞り、乾かします。

【アイシング】
卵白 7g
粉糖 50g

二等辺三角形に切ったオーブンシートかパラフィン紙を図のように巻き、端を折り返して止めます。粉糖に卵白を加え混ぜ、絞りやすい固さに調節した物を入れ、適宜先端を切つて絞り出します。





弥生神社 友の会

行事、ワークショップ、講座、書写会のご案内をメールや葉書でお送りします。入会金、会費は無料です。

弥生神社 友の会を発足しました。現在、134 名様に入会していただきました。不定期で行事や授与品などのご案内をお送りしております。今後はお茶会や交流会の開催など、友の会として新たな展開をめざしたいと計画しております。入会ご希望の方は、当社ホームページの受付フォーム、またはお葉書でお申し込みください。*お葉書でお申し込みの場合、「友の会 入会希望」と明記の上、お名前、ご住所、(メールアドレス)をお書きください。

編集後記 『弥生』十九号が発行となりました。ご協力いただきました皆さまに感謝申し上げます。今号は「声と言葉」をテーマに文章をいただきました。人の声は身体と心、存在そのものの延長のように思います。声はその場の空気を震わせ、声色は表情のようで、挨拶の声ひとつに人の温みも感じます。コロナ禍で直接の交流が難しくなった現在、より言葉を頼りに思いをのせている気がします。今号を通して、声を届けること声を聴くこと、言葉を紡ぎ伝えあうことの意味を、あらためて考えるきっかけにしたいだけなら幸いです。

大鹿村や沖家室島、鮭川村からの便りには、山や海の景色や生活の風景が浮かび、そこで暮らす人のささやかで深い気持ちがあくつきりと浮かびあがるようで、読む者の心を打ちます。謙虚に自然と向き合い、文化をはぐくむ、地に根を張り生きることの厳しさと豊かさを感じます。

ワークショップなどの記録を作りながら振り返ると、郵送やオンラインでの行事を通して、たくさんの方々、遠方の方々とも新たなご縁をいただき、お送りくださるメッセージが嬉しく、励みになりました。ありがとうございました。

宗教・文化講座では、祈りの継承、霊を慰めること、人の生と死に関わるテーマを、講師の先生と参加者の皆さまと真剣に学び考え合う充実した時間を共有しました。「グリーンフケアを考える会」では、人生の中での様々な喪失による悲しみに向き合う、理解しようと努める、支え合う、そんなあたたかな社会になりますよう、種となる言葉や思想、思いが発信できますように。今後も続けて参ります。(権禰宜 池田 奈)

印刷 文明堂印刷

編集 発行 弥生神社

神奈川県海老名市国分北 二一十三一十三